

高校生と考える「北斗市のまちづくり」

「北斗市のまちづくり」に対して、高校生の素直な思いを紹介する連載企画です。市内の4つの高校の生徒の皆さんに自由にテーマを考えてもらい、自由な意見をとりまとめた構成での連載です。最終回は「大野農業高等学校」の生徒の皆さんです。

最終回 大野農業高等学校

大農の礎となったのは、明治29年に大野小に併置された大野農業補習学校。新しい農業の芽は時代に翻弄されながらも地元有志に守られ、昭和16年に北海道庁立大野農学校として結実する。向野に移転した昭和18年、農業科と林業科の1期生が卒業。昭和25年、現在の北海道大野農業高

等学校に改称。昭和29年に生活科学科の前身である農村家庭科設置。昭和35年、園芸科設置。昭和38年、後の食品科学科となる食品加工科が新設。昭和41年、定時制課程18年の歴史に幕を下ろす。昭和46年、林業科の募集を停止し、農業経営科を新設。昭和59年に農業経営科が閉科し、現在の4学科制となる。

大農の特色は、農業の6次産業化



房田依舞姫さん 池田和真さん 樋口翔一さん
竹田翔己さん 小谷芽美さん
酒井皇快さん 青木沙也花さん 澤田七海さん 篠原史哉さん

を網羅したカリキュラムだ。6次産業とは、生産者（1次産業）が食品加工（2次産業）や流通・販売・福祉（3次産業）にも取り組み、生産物の価値や地域力を向上させること。生徒は地域交流を深めながら、課題研究や技術競技大会で生産能力を追求し、実習品は敷地内の鹿島屋で販売する。長く就職内定率100%を維持しているのは、幅広い職種を体験しているからだろう。現在、道内外合わせて227名が学んでいる。



考えたテーマは
大農生がつくる地域のつながり

インタビュー

—今日は生徒会と農業クラブから集まってもらいました。まず学科や専攻班による違いはあると思いますか？
「実習が楽しい。自分から動くことや考えることを学べて、自立していく感じがする」
「入学当初から男子全員が仲良くなって、寮生活も楽しかった」

「学校は楽しいけど、放課後がつまらない。大野には高校生が集まれる施設もないし、七重浜や上磯に行くにしてもバスが少ない」
「牛を引つ張ってみたくて入学したけど、実際に生き物を扱うのは大変だった。普通高校じゃないからこえて、仕事の面倒な部分も含めて学ぶことができたと思う」

—事前に答えてもらったアンケートでは、皆さんが地域に親しみを感じていることがよくわかりました。実習でふれあう地元の方々にはどんな印象を持っていますか？
「うまく言えないけど、親しみやすい空気が出てきていると思う。鹿島屋にいつも来てくれる方がいますし、緑



園祭にはたくさんの方がきてくれます」

「ひとり暮らしのお年寄りを訪問するサンタクローズ活動が一番地元の人と深く関わっている。毎年楽しみに待っていてくれるのも嬉しいし、孫のように優しく接してくれる」

「市渡小との稲作体験交流も楽しいふれあいのひとつ。関わり合える地域性があると思う」
「大農のお花きれいだねとか、パウンドケーキおいしかったよとか言ってもらえると、実習なんかだけど人のために働いていることを実感できる」

—皆さんが求める商業施設や交通機関の充実には、まずは利用する住民が必要となります。大野地区の地元離れを防いだり、移住者を増やしたりするためにはどうしたら良いでしょうか？
「桜回廊でもっと北斗市をPRできると思う。桜を見に来る車のナン



を網羅したカリキュラムだ。6次産業とは、生産者（1次産業）が食品加工（2次産業）や流通・販売・福祉（3次産業）にも取り組み、生産物の価値や地域力を向上させること。生徒は地域交流を深めながら、課題研究や技術競技大会で生産能力を追求し、実習品は敷地内の鹿島屋で販売する。長く就職内定率100%を維持しているのは、幅広い職種を体験しているからだろう。現在、道内外合わせて227名が学んでいる。



「僕は見ていると、道南以外の道民に知られていないような気がする」
「日本人よりも外国人のほうが住む可能性があると思う。スーパード海外の人を見かける回数も多くなって実感している」
「まちは静かだけど、人に活気はある気がする。お祭りやイベントには地元の人が多く参加しているから、そういった機会を増やしてみると良いと思う」

「私は厚沢部出身で、北斗市に来て一番驚いたのは、小さなお店がたくさんあること」

インタビューあとがき

南部の野田村から移住してきた野田作右衛門が米10俵を収穫して328年。何もなしの大野平野に田んぼを作るのは、頭で耕す農業こそが生命線だったはずだ。また作右衛門は「人々の定着は米にある」として、文月村を開拓したと伝えられている。出自にとらわれない共生意識がなければ、人が集まることはなかったはずだ。

大農がHACCPやGAP認証など、生徒と新しい挑戦を続けるのは、考える農業を伝承するためだと思う。生徒が自主的に東日本大震災や首里城再建の募金活動を行うのは、互助の精神を学んでいるからではないだろうか。取材した9名からは、実生活からの背伸びのない意見を聞くことができた。今までもこれからは、まちを拓くのは人。人を育てる大農がまちづくりをリードしてほしい。（市民リポーター・田山隆太）